

「第1回 JEASフォトコンテスト」審査結果の報告

当協会の設立35周年・一般社団法人移行を記念し、「第1回JEASフォトコンテスト」として、2013年度のJEASニュースの表紙を飾る写真を会員から募集しましたところ、多数のご応募をいただきました。誠にありがとうございました。ここに、その審査結果をご報告いたしますとともに、受賞者の皆さまにお祝いを申し上げます。

1 第1回フォトコンテスト審査結果の概要

(1) 応募の状況

2012年7月から12月までの応募期間中に、11名から合計34作品の応募がありました。

応募作品を季節別に整理すると表-1のとおりとなります。

(2) 審査の状況

2013年1月、協会外部から特別委員としてお招きした写真家の村田一郎氏立ち会いのもと、JEASニュース編集委員から6名、制作担当のオフィスK2栗原正治氏の計8名によって、厳正な審査を行いました。

季節ごとに各委員につき2点を選んで投票し、最多得票を得られた作品を入賞としました。同数票があった場合は、

各委員1点を選んで決選投票を行いました。

(3) 審査結果

各季節の入賞作品は表-2に示すとおりです。入賞作品は季節ごとにJEASニュースの表紙を飾り、約2,800部が印刷されて、全国に配布されます。

(4) おわりに

来年度以降も引き続きコンテスト形式で表紙写真を募集いたしたく、今回の課題をふまえて検討を進めてまいります。

次回募集の概要は、139号(夏号、7月1日発行)にてお知らせする予定です。

(編集委員：上原 励)

表-1 季節別作品数

季節	応募数
春	8
夏	8
秋	11
冬	7
合計	34

表-2 入賞作品一覧

季節	作品タイトル	受賞者氏名(敬称略)	所属
春	遠方に岩手山がかすむ平庭高原のお花畑	豊田 治	アジア航測株式会社
夏	準絶滅危惧種・エゾナキウサギのいる夏	藤嶋康夫	株式会社数理計画
秋	日本の絨毯	高柳茂暢	アジア航測株式会社
冬	冬の雲海と富士	稲葉修一	株式会社建設技術研究所



特別委員のご紹介

村田 一郎 Ichiro Murata

職業：山岳写真家 所属：日本山岳写真集団
 住所：神奈川県鎌倉市
 経歴：1964年3月28日東京都生まれ。
 1986年3月 東海大学海洋学部海洋工学科卒業、
 1997年12月 第35回(1997年度)「岳人」年度賞受賞、
 2006年 山岳写真家として独立
 共著：「実践 デジタル写真塾」(2006、山と溪谷社)、
 「日本の山風景」(2006、モーターマガジン社)、
 写真集「私的一名山」(2003、河出書房)ほか多数。

2 フォトコンテスト講評

コンテスト全体及び各入賞作品について、村田一朗特別委員に講評をいただきました。企画から審査、講評にわたりご助言・ご協力いただきましたことに感謝いたします。

(1) 全体講評

記念すべき第1回JEASフォトコンテストの結果は、応募点数こそ少なめだったが、力作も見られ、環境に留意したテーマの物も多く好感が持てた。中でも「準絶滅危惧種・エゾナキウサギのいる夏」はコンテストの主旨に非常によく合致しており、文句なしに選定された。その一方、選外となった写真の中にはスナップ的なものもあり、

少々残念な印象を受けた。現状では環境に留意した作品でなくても良いことになっているが、理想的には環境問題に触れるものが良いのは言うまでもない。写真だけでは伝えにくい場合には、タイトルで補完するのも有効であるし、頭の隅に意識しながら撮影・応募してもらえれば幸いに思う。

(2) 入賞作品講評



「遠方に岩手山がかすむ平庭高原のお花畑」

見事なお花畑を大きく取り入れ、足元から岩手山までのスケール感が素晴らしい。開花時期に現場にいないれば撮れないだけに、何度も足を運んだことだろう。上空に厚い雲があり、あまり条件が良くないにもかかわらず、お花畑に

光が当たっているために、かえってスケール感が強調できている。撮影条件をうまく生かし、撮影時の状況をよく写し込んでいる。お花畑の黄色が非常に印象的な作品だ。



「準絶滅危惧種・エゾナキウサギのいる夏」

エゾナキウサギとエゾシカの生息地はかぶっており、現在はエゾシカに追われてエゾナキウサギは生息地・個体数とも減少傾向にある。そんなエゾナキウサギに出会えるだけでも貴重であり、さらにそれをこれだけしっかりと撮影できて

いることに驚きすら感じる。生態に熟知していないとできない撮影であり、準絶滅危惧種であることから、本コンテストにまさに相応しいといえる。エゾナキウサギの位置といい、絞りの選択といい、絶妙だと思う。



「日本の絨毯」

高山での紅葉はその条件故に非常に鮮やかであることが多い。ハイマツの緑や青空などがコントラストを上げてくれる事もある。しかし、本当の紅葉のピークは時間にして半日くらいしかなく、実はかなり短い。冷え込みによる鮮やかな

紅葉と、霜による痛みのギリギリのバランスの上に成り立っているからこそ、艶やかであり、短命であるから潔さを感じるのだろう。稜線から俯瞰して撮ったおかげで、まさに絨毯のごとく写し込まれている。



「冬の雲海と富士」

富士山が独立峰であるから見られる景観だ。まさに雲海に浮かぶ島のごとく富士がそびえる様を、旅客機というハイアングルから捉えられたこと、日の出直後で雲海が僅かにピンクがかっている点など、シャッターチャンスに恵まれた

といえる。こういうチャンスをうまく生かしながら、旅客機の翼などに注意して作画したのが功を成した。富士山と雲海だけという単純化された画面整理に好感が持てる。